

日本台湾学会設立10周年記念シンポジウム

台湾研究この10年、これからの10年

〔総合司会挨拶〕

若林 正文

会員の皆様、ただいまより日本台湾学会設立10周年記念大会をはじめさせていただきます。雨の中、また遠方からもご参集いただきましてありがとうございます。

ご案内のように、学会では設立10周年に際しまして、通例一日の学術大会を一日半に伸ばすこととし、第一日目の本日に記念行事を組みました。その最初のプログラムが「台湾研究この10年、これからの10年」と題しましたシンポジウムです。

わたしは、その総合司会を仰せつかりました若林です。よろしくお願ひします。

プログラムにありますように、シンポジウムは基調報告とパネルディスカッションの二つの部分で構成することにいたしました。

第一部では、まず春山理事長に、学会活動のこの10年を学会の動勢報告の形で振り返っていただきます。ついで前理事長の天理大学下村会員より、関西地域における台湾研究に関してご報告いただきます。皆様ご案内のように、日本の台湾研究では、東京を中心とした地域と並んで、故石田元理事長や下村会員を中心として関西でも活発な研究活動が行われてきましたし、また今も行われています。日本台湾学会設立の当初からわたしのイメージでは、日本の台湾研究は、東京と関西との二つの中心を持つ楕円のような形で展開してきているものと見ておりました。それは今も変わりません。そこで、本日も春山理事長の学会全体としての会勢報告とともに、関西の研究活動の概要についても報告をいただき、理解を共有したいと考えた次第であります。

第二部では、シンポジウムのタイトルにあります「台湾研究この10年、これからの10年」を五名の会員に登壇いただいて討論したいと存じます。登壇いただくパネリストについては、企画責任者を仰せつかった私の方から「今後の10年において台頭する若手のターゲットになる会員」という方針を出し、常任理事の会員などからご推薦いただきそれぞれにご依頼をいたしました。頼まれた方々には、ご迷惑だったでしょうけれども、学会のために難度の高い役割をお引き受けいただき、たいへん感謝しております。このパネルディスカッションの司会もまた同じ考え方で川島会員にお願いしております。五名の方の紹介のほうは第二部の冒頭で川島会員にお願いすることにいたしますが、一点のみ企画責任者として説明をさせていただきます。第二部のパネラーの順番です。時間や人選の関係で第二部のパネルディスカッションにはコメンテーターを設けないことにし、討論そのものは当日にパネラー相互やフロアとの間に火花が散ったり電気が走ったりということを期待するという、つもりであり、従って第二部パネラーの順番もたいした意味はないものとみておりました。ただ、パネラー相互が事前にお互いの議論の内容を知っておいた方が相互作用はしやすいだろうと考え、いただいた報告原稿やレジュメはパネラーと司会者に添付ファイルでまわすことにいたしました。そうしたところ、歴史担当の駒込会員より、事前にいた

だいた各パネラーに原稿に触発されたところが多いので、自分が用意しつつあった原稿をもう一度書き直し、歴史以外の分野の研究にもあえてコメントする内容にしたいので、最後にまわしていただきたいとお申し出をいただきました。他のパネラーの方にとっては後出しのじゃんけんの気味がないわけではないのですが、歴史の部分のみでも難度が高い作業である上に他領域の研究にも検討の手を伸ばして討論のきっかけをあえて提供したいというお申し出であり、学際的な地域研究学会の趣旨にも添うものでありますので、他のパネラーの方にも通知した上で、企画責任者として駒込会員のお申し出をお受けし、本日のような順番になっている訳でございます。この点を企画責任者としてあらかじめお伝えしておきたいと存じました。

さて、これで総司会としての役目は終わったようなものですが、私もまた本学会設立にかかわった者の一人ですので、一言感想を述べさせていただきます。それは、日本台湾学会、ひいては日本の台湾研究が直面している挑戦ということについてです。わたしの考えでは、設立当初の挑戦とは、ある意味で政治的なものでした。台湾研究に外から関わってくる狭い意味での政治をいなしておいて学術団体としてしっかりしたものにする、有り体に言えば、「台湾独立」あるいは「中国統一」の応援団、友好団体と見なされないように注意し、日本における基準・水準から見て十分な程度に学術団体として自己確立していく、つまりは台湾研究を学術的地域研究の一分野として確立するというものであります。そのため、些末な事と言えば、例えば、設立当初数年は、現実政治観察を直接のテーマとする分科会の設定を自制していたこともありました。台湾をめぐる国際政治が学術的台湾研究に混乱を持ち込む危険が消えたと楽観できる理由はありませんが、設立10年を経て、このような挑戦にはある程度応えることができたのではないかと考えております。この点は続く春山理事長の報告から十二分に感得していただけるとと思いますが、例えば、この10年間十指に余る中堅、若手会員の手になる博士論文が堂々たる単著として刊行され、さらにそれらを基礎として次の研究が進んでいく発展スパイラルが出現し、関連研究領域からも一定の評価を得ていることなどが、その証左であると思います。学会設立に携わった一人として会員の皆様のあげておられる学術的成果とそのためになされた心血に対して心より敬意を表する次第であります。

さて、10年後の今日、日本の台湾研究が直面している挑戦とは、急速な研究環境変化からくるものであろうかと思えます。台湾現地での台湾研究は、80年代後半から盛んになり、本学会の設立も台湾での台湾研究熱の盛り上がり刺激を受けた面が少なからずあります。そして、その後の台湾現地における台湾研究の展開には爆発的なものがありました。その中には政治過剰もあれば空疎な大型シンポジウム開催など空騒ぎも多々あったと思われるのですが、全体的には質量とも大きな進展があり、ために台湾研究者の研究環境も激変しました。目を通すべき一次資料、二次資料の数や種類、咀嚼すべき先行研究や知り合いとなって意見交換すべき研究者の数などはいつの間にか、無慮無数となった感があります。この研究環境の激変にどのように応答していくのか。台湾研究者には、中国との関係を中心にダイナミックに変わっていく台湾の現状からどのようなメッセージやインスピレーションを受けていくのか、という大問題が学術技術的問題の外に存在しているのですが、台湾の外に基地を持つ研究者にとっては、これに加えて、こうした研究

環境の変化への対応にも、それに必要な経費と時間の調達、そのための研究戦略の策定など、一段と骨の折れるものとなっています。幸い台湾との交流に関して、経費の面では、交流協会の研究者派遣事業がこの間に制度化され、積極的な作用を果たしてきたことを我々は知っております。

しかし、台湾での研究の発展に加えて英語圏や中国大陸においても台湾研究は独自の展開を遂げてきており、こちらにも目配りしないわけにはいきません。特に、中国大陸そのものが、政治・経済・社会研究や国際政治・安全保障研究の面では、ある意味では、今後ますます台湾研究の現場そのものとなっていくことが予想されます。

われわれは、この10年で蓄えた力を基礎に新たな挑戦に応答し、これから10年の台湾研究を展開していきたいものであると思う次第です。

以上、僭越ながらわたしの感想を述べさせていただきました。

それでは、早速第一部に入ります。

